

『化粧二題』への思い

井上ひさし先生の戯曲を演じられる！しかも、一人芝居！
今、私は、役者として久しぶりの喜びと興奮の中に居ます。
なぜなら、素敵な物語を演ずる機会を与えられたからです。
捨てた母と、捨てられた息子の物語。

ボクは、捨てられた男を独りで演じます。

井上ひさし先生の作品は『箱根強羅ホテル』が最初。

この時も“遅筆堂”の看板はご健在で、完成台本が上がったのは初日 3 日前ぐらい！ファックスが夜中にカタカタとなり出し、原稿が 1, 2 枚やってくる。ところが私の出番は一向になく、稽古場に行ってもやることなく先輩俳優だけが台詞をもらい、その日の稽古に合わせてブツブツ台詞を唱えている。「うわぁ～俺は稽古がしたくても本が来ないよ～！」と気が狂いそうな毎日でした。

ところが今回は、もう手元に本がある!!

井上ひさし先生のホンなのに目の前にある!!!

もうこれだけで私は幸せ者と言うほかありません。

そして、美しくやさしい日本語と、心にしみる素敵なお話。

これだけ揃って燃えなかったら男じゃない、役者じゃない、…とばかりに喜んでいました。今度は稽古をいっぱいできます。天国で井上先生が丸いメガネの奥でニコニコしながら「内野君、これでダメな舞台だったらぼくのせいじゃないよ。だって本はできてるんだからね」と語られている感じです。天国にいらっしゃる井上ひさし先生にも笑って泣いていただけるように頑張ろうと思っ

そして、劇団を辞めてから実に 21 年ぶりにタッグ組ませて頂く鶴山仁さん。実は、鶴山さんは、ボクが文学座研修生の頃、初めてのプロの舞台に抜擢して下さったまさにその人なのです。21 年経って、内野は、その程度かと、軽く足払いなのか、お、内野なかなか力をつけたな…となるのか、とにかく、鶴山さんの演劇人としての大きな胸に体当たりして、思いもよらぬエネルギーが爆発するのを楽しみにしているところであります。

この本を初めて読んだとき、“男のやせ我慢”のカッコよさ、いじらしさに泣けました。虚勢を張ったり、武士は食わねど高楊枝みたいな姿はあまり見かけなくなったように思いますが、この本には、いつの時代にも変わらない男子の生き様があると思っています。母に捨てられてから再会するまでを、井上さんの巧みな独り対話劇で魅せていく手法は、僕にとっても刺激的な冒険と戦いになるはず

どうぞ内野聖陽の挑戦を目撃しに劇場まで足をお運びくださいませ!!!